

〈私の視点〉シリア内戦：紛争での教育の破壊防げ

モーザ・ビント・ナーセルさん（カタール首長妃、基礎・高等教育担当ユネスコ特使）

シリア第2の都市、アレッポの市外には子どもが通える学校はありません。校舎はこの数週間で2度空爆され、廃墟と化しました。学校は軍の基地になり、ヨルダンやレバノン、トルコの過密なキャンプにいる難民の子どもは、先生を見つけられれば幸運です。

教育が攻撃されている。シリアだけではありません。アフガニスタンからコートジボワール、ガザから南スーダンまで、紛争地域はみな同じ状況です。なんの教育も受けていない子どもは2800万人にのぼります。国際法で禁止されているにもかかわらず、学びの神聖さが最もひどい方法で冒涇（ぼうとく）されているのです。

幸いなことに、グローバルコミュニティがこの問題に気づき、重要なイニシアチブが数カ月のうちに動き出します。私が会長の非営利団体「エデュケーション・アバブ・オール（何よりも教育を）」は、紛争地での教育を保護する国際法をまとめた「不安定な安全保障と武装紛争における教育の保護」と題するハンドブックを発刊しました。捜査官や弁護士、判事が、子どもが教育を受ける権利に違反した者を裁く際に強力な道具となるはずです。世界の指導者が集まった先日の国連総会では、6100万人の子どもが就学していない「世界の恥」に対処するキャンペーンを、潘基文（パンギムン）国連事務総長らと始めました。

貧困や紛争の中でも子どもたちに教育を与えることは可能です。私は国連教育科学文化機関（ユネスコ）の特使として、イラクやガザ、インドネシアなどで、比較的簡単で革新的な介入が役に立つのを目にする機会がありました。

アラブにおいて教育面で指導的存在だったイラクは、30年に及ぶ紛争の結果、識字率が下がり、国民の4分の1が文字を読めない状態になりました。いま公式、非公式な教育を通じ、識字率を向上させようとしているのを目の当たりにして、教育は国の傷を癒やすカギだと確信させられました。

教育から得るものは多いのです。**字が読める母親の子どもは5歳の誕生日の後に生き延びる可能性が50%高い。**発展途上国では初等教育を1年間長く受ければ、将来の給与が最低10%伸びます。

来月、カタールの首都ドーハで「ワールド・イノベーション・サミット・フォー・エデュケーション」の年次会合が開かれます。世界の教育コミュニティが一堂に会する場で、世界の子どもに質の高い教育を与える新しいイニシアチブに参加するよう、多くの方々に呼びかける予定です。